UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
PL765.K362X C001
KANZE-RYU KAITEI UTAI-BON TOKYO
2:3:1
3 0112 031017285

PL
765
.K362x
v.2
no.3:1

山

観世流改訂謡本

外三

APR 20 1938
PRESENTED BY
MR. T. Wake.

UNIVERSITY OF
ILLINOIS LIBRARY
AT URBANA-CHAMPAIGN
ASIAN

765
.K362X
v.2
no.3:1

脇能

嵐山（アラシヤマ）

三月

後ヅレ　勝手神
ツレ　木守神（前ハ嫗）
シテ　藏王權現（前ハ尉）
ワキ　敕使

ワキ次第上（三人）ツヨク
吉野の花の種とりし。吉野の花の種とりし嵐の山ニ急がん

ワキ詞
抑これハ當今ニ仕へ奉る臣下なり。さても和州吉野の千本の櫻ハ聞しめし及ばれたる名花なれども。遠方十里の外なれバ。花見の御幸かなひ給ハぬぞ。さるニより

千本の櫻を嵐山に移しおかれて候間。此春の花を見て来れとの宣旨を被り。唯今嵐山へと急ぎ候。

道行上（三人）都よりハ。げにも嵐の山櫻。げにも嵐の山櫻。千本の種ハそれぞとて尋ねて今ぞ三吉野の。花ハ雲かと詠めける。其歌人のなごりぞ。とよそめよあれバ猶しもの。

眺妙なるけしきかな眺妙なるけしき
かな　急ぎ候程に。これははや嵐山に
着きて候。心静に花を眺めうずるにて候

シテツレ二人上　眞ノ一声

花守の住むや嵐の山櫻。雲も上なき。
情かな

二ノ句　ツレ

千本に咲ける種なれや。春
も久しき氣色かな

シテサシ上

これとこの嵐
山の花を守る夫婦の者にて候なり。

シテ二人ツレ　それ遠方十里の外なれば。花見の御幸なき折も。名に負ふ吉野の山櫻。千本の花の種とりて。此嵐山に植ゑおかれ。後の世までの例とかや。これとても君の恵かな

下歌　げに頼もしや御影山治まる御代の春の空

上歌　さも妙なれや九重の。さも妙なれや九重の。内外に通

に花車。轅も西にめぐる日の影ゆく
雲の嵐山。戸無瀬に落つる白波も。散
るかと見ゆる花の瀧。盛久しき氣色
かな盛久しき氣色かな。不思議
やなこれなる老人を見れば。花に向ひ
渇仰の氣色見えたり。おことはいかなる
人やらん シテ されば是は嵐山の花守

にては。又嵐山の千本の櫻ハ。皆神木(シンボク)
さては程に花に向ひ渇仰申は
ワキ「そも
嵐山の千本の櫻の。神木たるべき謂(イワレ)ハ
いかに
シテ「げにげに不審ハ尤理(コトワリ)。名におふ
吉野の千本の櫻を。移しおかれし其
故に人こそ知らねども。うくハ。木守(コモリ)勝手(カツテ)
の神(カミ)もまとの花に影向あるものを

げにやさしもこそ厭ふ憂き名の嵐山。
取り分き花の名所とて。何とて定め置
きけるぞ　シテ　それこそ猶も神慮なれ。
名におふ花の奇特とも。顕さんその
御恵　げに頼もしや此影山。靡き
治まる三吉野の。神風あらばおのづから。
名こそ嵐の山なりとも　地下歌　花はよも

散らじ。風も勝手木守そて。夫婦の
神われぞかし。音たかや嵐山。人よな
知らせ給ひそ
上歌
笙の岩屋の松風ハ。笙の岩屋の松風ハ。實相の花盛開
くる法の聲きて今ハ嵐の山櫻葉
摘のりの水青く。眞如の月の澄める
世よ。五濁の濁ありても。流ハ大堰川

其水上よも盡きじ。いざいざ花を守らふよいざいざ花を守らふよ。春の風は空に滿ちて春の風は空に滿ちて。庭前の木を切るとも神風にて吹きおへきがら妄想の雲も晴れぬべし。千本の山櫻長閑けき嵐の山風は。吹くとも枝はならさじ。此日もまでよ呉竹の。

夜の間を待たせ給ふべし。明日も三吉

野の山櫻。立ちくる雲はうち靡きて。

夕陽残る西山や。南の方より行きまはり

南の方より行きまはり・

中入来序

上

下端

三吉野の。三吉野の。千本の花の種

植ゑて。嵐山あらたなる神遊びそめで

たきこの神遊びそめでたき

後ヅレ二人上

ノドカニ

いろ

そのいろ〳〵の。花こそまじれ白
雲の。木守勝手の恵なれや松の色

後ツレ二人中入

青根が峰こそよ。青根が峰こそよ。小倉
山も見えたり。向ひは嵯峨の原。下は大
堰川の。岩根よ波かゝる亀山も見え
たり萬代と。萬代と。囃せ囃せ神遊。
千早ぶる

天女ノ舞　地上歌

神樂の鼓聲澄みて。

神樂の鼓聲澄みて。羅綾の袂をひる
がへし飜す舞樂の秘曲も度重な
りて。感應肝に銘ずるをりから。不思
議や南の方より吹きくる風の。異香
薫じて瑞雲たなびき。金色の光輝
きわたるハ。藏王權現の來現かや
和光利物の御姿。和光利物の御姿

●仕舞

早笛
打上

後シテ「われ本覺の都を出でゝ。分段同居の塵に交はり　地「金胎兩部の一足をひつさげ　シテ「惡業の衆生の苦患を助け　地「さて又虚空に手をあげては　シテ「忽ち苦海の煩惱を拂ひ　地上「惡魔降伏の青蓮のまなじりは。光明を放つて國土を照し。衆生を守る誓を

顕し。木守勝手。蔵王権現同體異名の姿を見せて。おのく嵐の山よ攀ぢのぼり。花よ戯れ梢よかけつて。さながらこゝも。金の峯の。光も輝く千本の櫻。光も輝く千本の櫻の。榮ゆく春こそ。久しけれ。

文學博士　井上頼圀　本文監修
丸岡　桂　本文訂正
觀世清之　節附訂正

稽古摘要

發心入門	始めたる大正　年　月　日	得たる大正　年　月　日	稽古感想

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十一番六十一冊、又は別組二十八番二十八冊の内一組、或は三組全部買ひ揃へられ、節、返送料を添へて發行所へ送附せられなば、最新の無料にて五番綴の表本[illegible]一冊宛[illegible]使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

著作權所有

大正七年三月二十日印刷
大正七年三月二十日發行

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　土居源太郎
印刷者　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條愷
印刷所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條式金屬版印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地　電話本局二三二九、振替東京一三四七五　觀世流改訂本刊行會

PL
765
.K362x
v.2
no.3:2

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
PL765.K362X C001
KANZE-RYU KAITEI UTAI-BON TOKYO
2:3:2
3 0112 031017293

月

観世流改訂謡本

外三

APR 20 1938
PRESENTED BY
Mr T. Wake

UNIVERSITY OF
ILLINOIS LIBRARY
AT URBANA-CHAMPAIGN

四番目
畧二番

花月

二月

シテ 花月
ワキ 旅僧
狂言 清水門前者

PL 765 .K362X V.2 no.2:2

ワキ次第上 風に任する浮雲の。風に任する浮雲の
とまりはいづくなるらん これは筑
紫彦山の麓に住まひする僧にて候。
われ俗にて候ひし時。子を一人もちて
候ひしを。七歳と申しゝ春の頃。いづくとも
なく失ひて候程に。これを出離の縁と

思ひ。かやうの姿となりて諸國を修行仕り

道行上

生れぬさきの身を知れば。生れぬさきの身を知れば。憐むべき親もなし。親のなければ我が為に。心をとむる子もなし。千里を行くも遠からず。野に臥し山にとまる身のこれぞ眞の。すみかなるこれぞ眞のすみか

なる、、　ワキ　急ぎ候程に。これははや花の都
に着きて候。まづ承り及びたる清水に
参り。花をも眺めばやと思ひ候　△狂言　定め
て今日は清水へ御参りある事にてある
まじく候。御供申し彼の人に見せ申し候
べし　△　シテ　抑これは花月と申す者なり。
ある人我が名を尋ねしに答へて曰く。

月ハ常住にしていふに及ばず。偖和
の字ハと問へバ。春ハ花夏ハ瓜。秋ハ果
冬ハ火。因果の果をバ末後まで。一句の
ためよ殘まそといへり。これを聞いて
地上「さてハ末世の一句なりとて天下よ
隱れもなき花月とわれを申すなり
狂言「何とて今までハ遲く出でたぞ

シテ さんば今までは雲居寺よりひしが。花は心を引く弓の。春の遊の友だちぞ。中違ひしこそ参りたり

狂言 △さらばいかう

ものの如く小歌を謡ひて御遊び候へ▽

シテ ●来し方より

地 今の世までも絶えせぬものは。恋といへるくせもの。げに恋はくせものくせものかな。身はさらく

さら。さらさらさらよ戀こそ寝られね

(狂言) あれ御覧ゆへ鶯が花を散らしゆよ

(シテ詞) げに〳〵鶯が花を散らしゆよ。某射て落しゆそん

(狂言) 急いで遊ばしゆへ

(シテ) 鶯の花踏み散らす細脛を。大薙刀もあらばこそ。花月が身にかたきの無ければ。たち刀は持たざりけり。的射んが為。又

かゝる落花狼藉の小鳥なりとも。射て落さんが為ぞかし。異國の養由は。百歩に柳の葉をたれ。百に百矢を射るに外さぞ。われは又花の梢の鶯を。射て落さんと思ふ心は。其養由にも劣るまじ。

カヽル中ヘ ツヨク
あらおもしろや。

地上 ヨワク
それは柳これは櫻。それは雁がねこれは鶯。それそれは養由

これは花月。名こそかはるとも。弓は隔は
よもあらじいでものを見せん鶯。いで
ものを見せん鶯とて。履いたる足駄を
踏ん脱いで大口のそばを高く取り狩
衣の袖をうつ肩ぬいで。花の木陰よ
狙ひ寄つてよつぴきひようと。射ずや
と思へども仏の戒め給ふ殺生戒をば

破るまじ。△言語道断おもしろき事を仰せられ候。また人の御所望よて候。當寺のいはれを曲舞に作りて御謡ひ候よしを聞しめして候。一節御謡ひ候へとの御所望にて候▽

シテ詞 やすき事謡うて聞かせ申さうずるにて候

●獨吟サシクセ

サシ上 ツヨク ●されば是や大慈大悲の春の花

地 十悪の里にかりぞらしく。三十三身の秋の月。五濁の水に影清し。抑この寺は坂上の田村丸。大同二年の春の頃。草創ありしこの方。今も音羽山。嶺の下枝の滴りに。濁る心もなき清水の。流れを誰か汲まざらん。ある時此瀧の水。五色に見えて落ちければ。それを怪

しめ山より。其水上を尋ぬるに。こん
じゆせんの岩の洞の。水の流に埋れて
岩は青柳のおち木あり。其木より光さし。
異香四方に薫ずれば　さてハ疑ふ
所なく　楊柳観音の。御所変にて
ましまさで皆人手を合せ。猶も其
奇特を知らせてたべと申せば。おち木の

柳は緑となり。櫻はあらぬ老木まで。皆
白妙に花咲きけり。見させてこそ千手の
誓には。枯れたる木にも。花咲くと今の
世までも申すなり。あら不思議や。
これなる花月をよくよく見候へば。某が
俗にて失ひし子にて候はいかに。名のつて
逢ばやと思ひ候。いかに花月に申すべき

べき事の候　シテ「何事にて候ぞ　ワキ「御身ハ
何處(イヅク)の人にてわたり候ぞ　シテ「これハ筑
紫の者にて候　ワキ「さて何故かやうに
諸國を御廻(メグ)り候ぞ　シテ「われ七つの年
彦山(ヒコサン)に登り候ひしが。天狗に取られて
かやうに諸國を廻り候　ワキ「さてハ疑ふ
所もなし。これこそ父の左衛門よ見

わすれてあるか　△狂言のうく御僧ハ

何事を仰せられ候ぞ▽　早きんばこの

花月ハ某が俗にて候ひし子にて候程に。

さてかやうに申候　△狂言まぢかき事を

承り候。まづくそなたへ御のき候へ。

いかに花月へ申候。いつものやうに八撥(ヤツバチ)

を御打ち候ひて皆人に御見せ候へ▽

シテ そもわれ筑紫彦山に登り。七つの年天狗に

地 とられて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ

羯鼓打上

・取られて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ。まづ筑紫には彦の山。深き思ひを四王寺讃岐には松山降り積む雪の白峯さて伯耆には大山さて伯耆に

は大山。丹後丹波の境なる鬼が城も。
聞きし天狗よりも恐ろしや。さて京
近き山々さて京近き山々。愛宕の山
の太郎坊。比良の峰の次郎坊。名
高き比叡の大嶽よ。少し心のすみ
しこそ月の横川の流れ。日頃はよそ
よのみ見てや止みなんと眺めしよ。葛

城や。高間の山。山上大峯釈迦の嶽。
富士の高嶺にあがりて。雲に起き
臥す時もあり。かやうに狂ひめぐりて。
心乱るゝこのさゝらさらさらさらと
すつては謡ひ舞うては數へ。山ゝ嶺ゝ
里ゝをめぐりめぐりてあの僧に。逢ひ
奉る嬉しさよ。今よりとのさゝらさつ

世捨てゝさいそぐ。あれなる僧よ。つれ
来らせて佛道つれ来らせて佛道の
修行よ出づるぞ嬉しかりける出づる
ぞ嬉しかりける。

大正十一年十二月十日午後五時

於 南外堀町十三丁目 市橋善七邸

囃子組

高砂　中島馨　戸次又一　野村起雲　川村鉦二　水野心象

八島　和氣忠雄　永田虎之助　高橋榮次　安阿彌長三郎

松風　原宏之　木造大觀　加藤豊　田島香園

花月　植松錄造　木造大觀　二木滿　藤田米次郎

清經　岡只夫　永田虎之助　河村鉦二　安阿彌長三郎

熊坂　齊藤安次郎　大野芳穗　澤潟袁三　林玄象　田島香園

敦盛　河村鉦二　水野申三　木村二瓢　安阿彌長三郎

鉄輪　小出鎮二　大野芳穗　小野恒彰　野崎光之亟　藤田米次郎

唐船　市橋善七　水野申三　鈴木太甲　林玄象　田島香園

舟辨慶　早笛流　小野恒彰　戸次又一　福井五郎　野崎光之亟　藤田米次郎

附祝言

以上

鳳咏會

文學博士 井上頼圀本文監修

丸岡桂本文訂正

観世清之節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

大正六年十一月廿日印刷
大正六年十一月廿五日發行

著作權所有

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎

印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷

印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

大正本 一番綴

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地 電話本局三八〇九、振替東京一三四七五 観世流改訂本刊行會

使用家の特權

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裁切り所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候